

名護市仲尾次集落における集落の形成思想と空間構造

松 井 幸 一 ・ 高 橋 誠 一

Ideas of Formation and the Spatial Structure of the Nakaoshi Settlement

MATSUI Koichi TAKAHASHI Seiichi

Ryukyu, centered around the mainland of Okinawa, developed its own culture and folk customs while actively interacting with different regions across the ocean. The maritime trade with neighboring countries introduced not only goods, but foreign culture, folklore, and philosophies to Ryukyu, one of which was *feng shui*, which is associated with the forming of settlements. The spatial structure of traditional settlements in Ryukyu, however, reflects a combination of *feng shui*, brought from a foreign land, and the “*kusati*” philosophy, native to Ryukyu. This paper examines the interior spatial structure of the Nakaoshi settlement, located in Nago city, in the northern part of Okinawa Island, and reveals the characteristics of the ideas of formation and the spatial structure of the settlement.

This study discusses the settlement format, the street format, the distribution of sacred spots, the main families and the branch families, the distribution of *ishiganto* (a stone slab used to ward off evil spirits), the land division, and the number of housing lots per division, and examines how each of these components is related to the formation ideas and spatial structure of the settlement. First, the Nakaoshi settlement takes a format called *haizan ryusui*, enclosed by mountains on the back and adjoined by water in the front. The street format in the settlement is somewhat “messy” with many curved and intentionally unaligned streets. The *haizan ryusui* format and the unorganized street format are a result of people’s deep concern with *qi*, indicating that the Nakaoshi settlement is influenced by *feng shui*.

Sanctuaries called *uganju* are concentrated toward the back of the center area, around which are *niya*, houses of the main families. Houses of the branch families

are mostly located to the front of *niya*, and houses of each family tend to spread east to west. Also, the higher the religious ranking of those adopted into the main family is (e.g. shinto priests, female bishops), the closer to *uganju* their *niya* is located. The supremacy of *uganju* was the central idea in house distribution. The spatial structure seen here is a product of the *kusati*-inspired formation of living and religious spaces.

The sixty *ishiganto* are densely, but extensively laid out in the *Nakaoshi* settlement. The distribution is wide and even throughout the settlement. If this distribution of *ishiganto* is part of the succession of people's traditional view of geography, it is obvious that this view has been shared by the entire settlement, not just a particular group of people.

Finally, the settlement has a mixture of vertical, horizontal, and square land formats. Older houses are located mostly in the area where vertical and horizontal formats are combined, which indicates that land division and houses built in each division are closely linked. The number of housing lots per division increases as one goes from the *uganju* area, where one housing lot per division is common, to the periphery of the settlement, where each division has two or three housing lots. This is because houses built farther away from *uganju* and *niya* belong to lower-ranked families according to the *kusati* philosophy, and these lower-ranked families are further divided into each division for housing space. In short, this hierarchical allotment of housing spaces also reflects the *kusati* philosophy.

After examining the ideas of formation and spatial structure of the settlement, this paper concludes that the formation of the *Nakaoshi* settlement is based on both *feng shui* and *kusati*. Also, the analysis of land division, the number of housing lots per division, and distribution of houses suggests a close connection between the division format and *kusati*. The influence of *feng shui*, *kusati*, and the traditional view of geography, which are to be found throughout the settlement, contributes to the current spatial structure of the settlement.

1. はじめに

(1) 問題の所在と研究目的

沖縄本島を中心とする琉球¹⁾は古来、独自の文化・民俗を持ちつつ海を隔てた諸地域と活発な交流をおこなってきた。その交易範囲は広大で当時、大和と呼ばれた日本本土を初め、中国

1) 本稿で用いる琉球は琉球王国の領域とし、北は奄美群島を含む。



図1 琉球王国の貿易ルート

高良 1998, 65頁より引用。

や朝鮮，果てはマラッカ（マレーシア）やシャム（タイの旧名），アンナン（ベトナムの旧名）など東南アジアにまでおよんだ（図1）。このような各地域との交流は琉球が当時の海域ネットワークの中心にあり，東アジア中継貿易の中で重要な位置を占めていたことを示す。

海域を通じた各地域との活発な交易は物品だけでなく様々な文化・民俗・思想を琉球にもたらしたが，その中でも特に大きな影響を与えたのが中国であった。琉球と中国との交易が正式に始まったのは朱元璋によって明が建国されてから4年後の1372年の事で，明の正式な使者が中山王²⁾の察渡を訪れている。その後，進貢貿易が始まることによって琉球王国は莫大な利益を得て大いに繁栄する。進貢貿易では琉球側から貢物を送ることによって中国側から物品を下賜される形式をとり，下賜されるものには当時の一大勢力であった中国の様々な「もの」の他

2) 琉球は13世紀から14世紀初頭まで按司と呼ばれる有力者によって割拠されていたが，次第に北山・中山・南山の3つの勢力に統合されていった。三山にはそれぞれの王がいたが1416年に北山，1429年に南山が中山王によって討たれたことによって三山は統一された。

に曆や書物など数多くの「知識」や「文化・民俗」があった。進貢貿易が続いた結果、琉球には中国の知識、文化、民俗が幅広く伝播することとなり、それらは琉球社会に多大な影響を与えた。

中国からもたらされた新しい知識の中にはもちろん「風水」の考えも含まれていた。そもそも風水とは「古代中国に発し、現代東アジアおよび東南アジアその他の周辺地域にも影響の及んだ、独特の環境判断、環境影響評価法、相地卜宅の方法論の総称」を指す³⁾。風水の歴史を振り返れば、風水判断がおこなわれた初期には家相判断（相宅）を主とするものだったが、その後、祖先崇拜の観念から秦・漢期を通じ次第に墓相判断（相墓）を第一とするようになり、風水説が普及したのちは「風水」といえば一般に「陰宅風水」を指し、風水説といえば通常「陰宅風水」の判断法を指すようになっていく⁴⁾。日本でも一部の天皇陵や古墳が風水の考えにあって指摘されるように「陰宅風水」の影響は各地でみられる。さらに「陰宅風水」が普及する一方で、平安京に代表されるように人間環境を判断する「陽宅風水」と呼ばれる風水の考えも各地に広がっていく。「陽宅風水」は大きくインテリアの風水とエクステリアの風水の2つに大別され、集落や都城に関する風水はエクステリアの風水に含まれる（図2）。これらは「コミュニティの風水」と呼ばれるもので基本的には対象となるものの周囲を山に囲まれ南側に水が流れる地形を最良とし、これは風水思想の広がる地域では概ね同様である（図3）。中国との活発な交流の結果、当然として琉球にもこの「コミュニティの風水」の考えは伝播して、首里城およびその城下町に風水思想が適用されている。例えば『琉球国旧記』の「附（首里）地



図2 系統別の風水判断対象

渡邊 2001、40頁より引用。

3) 渡邊欣雄『風水の社会人類学 中国とその周辺比較』風響社、2001、37頁。

4) 前掲3) 39-40頁。

理記」の項には「考察すると、我が首里城は……龍の来歴は、気脈が集まっており、まことにすぐれた点がある。それに国殿の立向きが大変良い。殿前の輦道の方向が国殿と同じ方向でないのが、最もすぐれた点で、しかも、広福、漏刻、瑞泉、観会などの門が左にまわり、右にめぐり、曲折してまっすぐではない。すべて、その方を得たものといえよう。……首里というこの都を万世にわたって、決して改建してはならない。……」と首里城およびその周辺地形についての風水判断の記述がみられる⁵⁾。

では琉球に風水が伝播したのはいつ頃であろうか。これには諸説あるが史書『琉球国由来記』によれば、康熙6（1667）年に通事の周国俊が中国の福建で風水を学んだのが始めとされる。吉川はこれより少し後の『唐棠舊記全集』に風水判断の記述があることから、琉球の風水地理は周国俊によって本格的な風水思想がもたらされた後に定着したと指摘する⁶⁾。一方、日本本島では平城京や高松塚古墳の壁面に描かれた四神にみられるように、かなり早い時期から風水思想がみられる。琉球と日本本島との活発な交流を考えれば、周国俊によって風水思想がもたらされる以前に琉球にも風水の基本的な考え方は伝播していたと考えるのが自然であろう。

琉球では集落レベルの「陽宅風水」判断は活発におこなわれていたと考えられているが、戦禍もあって史料が失われている場合が多くその詳細ははっきりとしない。しかし、わずかに残る風水判断に関する史料からいくつかの研究がおこなえ、坂本と江田は八重山地方の波照間島・

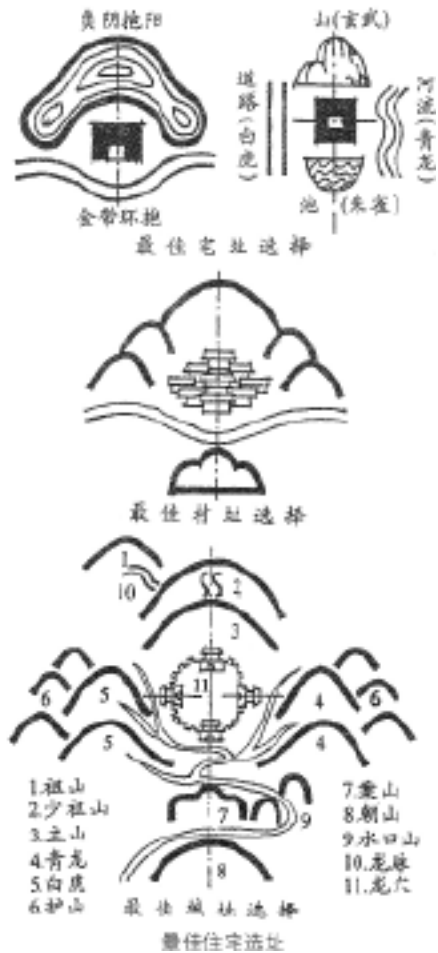


図3 最良の風水地形
石橋青 2007、284頁より引用。

5) 琉球王府編，原田禹雄訳『訳注琉球国旧記』榕樹書林，2005，40頁。

6) 吉川博也『那覇の空間構造 沖縄らしさを求めて』沖縄タイムス社，1989，163頁。

与那国島を除く全集落を対象とした風水見聞記録「北木山風水記」をもとに、集落空間形成と風水のかかわりを検討し、宅地道路条件の変容と風水判断の関係を明らかとしている⁷⁾。この事例は琉球全域で幅広く風水見聞がおこなわれていたことを示すとともに、都城・村落にかかわらず集落空間の形成に風水の考えが活用されていたことを明示するものである。また、坂本・江田の研究からは風水思想が宅地の間取りや付属建築物にも適用されていたことが伺える。この点については鶴藤もその著書の中で屋敷や門の位置について「風水見」と呼ばれる人物に判断を仰ぐことがあることを指摘し⁸⁾、生活の細部にまで風水の考えが浸透したことは確実である。さらに首里城でも内郭内部の配置比例関係についての考察がおこなわれた結果、風水思想が象徴空間としての首里城の築城計画に影響を与えた可能性が示されている⁹⁾。

このように琉球の都城・集落はその形成段階で中国から流入した思想の影響を強く受けている。しかし、集落の形成は風水思想にのみ基づくものではなく、土着の思想である「腰当」と呼ばれる考えかたも併せ持つ。これは琉球の伝統的集落で一般的にみられる集落内の空間構造に関する考え方で御嶽と呼ばれる聖地を最上位に置き、上位に宗家、下位に分家を配置する思想である。この思想に適う集落では御嶽、宗家、分家の位置が明確に区分され、居住関係は上位から下位に向けての階層性をなす(図4)。しかし、この「腰当」思想もあくまで原則であって地域の性格に合わせて空間構造は柔軟に対応しており、例えば筆者らがすでに調査した王府の陶工集団が居住していた壺屋集落では、「腰当」の考えの他に焼き物の種類によってその居住地が区分されていた¹⁰⁾。

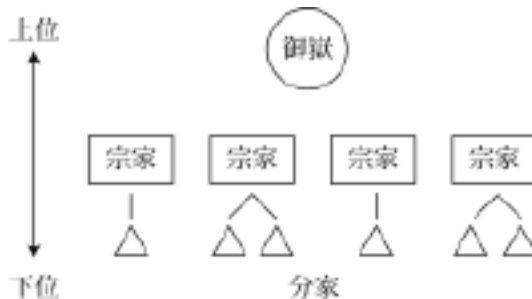


図4 腰当思想の概念

7) 坂本磐雄・江田知史「北木山風水記に基づく沖縄八重山地方集落の宅地道路条件の変容」沖縄文化研究 21, 1995, 1-37頁。

8) 鶴藤鹿忠『琉球地方の民家』明玄書房, 1972, 309-332頁。

9) 浦山隆一・秋元一秀「首里城の象徴空間構成—風水思想の築城計画に及ぼした影響—」学術講演梗概集, F, 日本建築学会, 1989, 661-662頁。

10) 松井幸一「那覇市壺屋集落における空間構造の特性」歴史地理学52(3), 2010, 30-48頁。

したがって琉球の集落形成思想を今一度考えれば、琉球は中国からの「知識」や「文化・民俗」が流入した結果、「風水思想」という大きな考え方を導入し集落形成においても大きな影響を受けた。しかし、その実態は単なる「知識」の模倣ではなく元来あった思想や地域の実情を踏まえた集落形成となっている。つまり他から伝播した集落形成の思想と元からの思想の混合によって現在の特徴ある集落景観が形成されているといえる。そこで本稿では伝播した集落の形成思想である「風水」思想の形跡が残りつつ、御嶽などの拜所も残る伝統的な集落を選定し、集落内部の空間構造を考察することから集落の形成思想と空間構造がどのような特性をもっているのかを明らかとする。研究対象とする集落は沖縄本島北部の名護市に位置する仲尾次集落とする。

(2) 研究方法

集落の空間構造や民俗的な「もの」の配置は集落形成の思想を如実に示すものである。例えば、集落形態や街路形態は地割制度や集落の形成思想などを表し、民俗的事物は住民の慣習や民俗の観念を示す。したがって集落の空間構造や民俗的な「もの」の配置を考察することはいかに集落が形成されてきたかを捉えることに繋がり、それは集落の形成過程を捉えることでもある。

集落形態や内部の街路形態を分析するには地割や集落の形成思想の考察が欠かせない。地割についてはすでに既往研究によって、1736年を境としてそれ以前と以後では区画が大きく異なることが指摘されているし、建築学の分野からは一区画あたりの敷地数や形態に歴史的な変遷があることが明らかとなっている（図5）。また、「腰当」思想については御嶽と宗家を上位に置く形成思想や御嶽と集落内の空間構造を考察したものなど様々な研究がすでにある。

しかし、集落内部の空間構造は様々な要素から構築されるために単一の要素を取り上げ考察しただけではその本質を捉えることは難しい。例えば集落全体の向きをとっても地形的要因や民俗的方位観に影響されることが多々あるし、石敢當やヒンプンなどの民俗的要因の多寡は伝統的な地理観・民俗観を継承しているかによって大きな違いがでるものである。さらに集落拡大の歴史的過程とそこに居住する住民の属性なども空間構造の重要な要素の一つであろう。それゆえに集落の空間構造を本質的に捉えようとするならば、それを構成する諸要素を一体的に検証し、相互の影響まで考慮して考察する必要がある。そこで本研究では集落の地形、街路形態、聖地と住民の分布、一区画あたりの宅地数とその形態から集落内部の空間構造を分析し、石敢當の分布から伝統的地理観の残存を考察する。そしてそれら集落を構成する諸要素が互いに相互に影響を与え、現在の集落景観を構成しているのかを明らかにしていきたい。

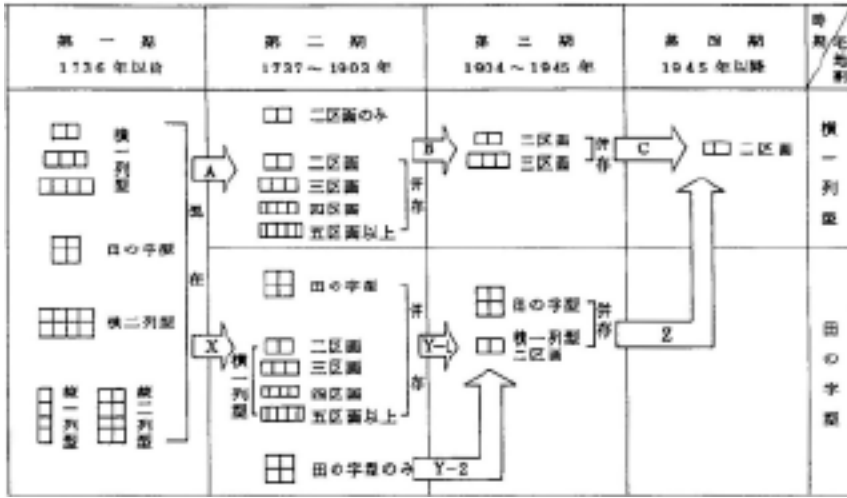


図5 宅地割りの変容過程
坂本 1989, 112頁より引用。

2. 対象地域の概要

仲尾次集落は名護市の北部に位置し羽地内海に面する（図6）。仲尾次集落が属する羽地地区は17世紀中頃の「絵図郷村帳」や「高究帳」では旧羽地村の他に羽地内海の対面にある屋我地島、今帰仁間切の一部、大宜見間切の一部を含むより広い範囲であった。その後、大宜見間切の新設や今帰仁間切との間切組み替えなどの経緯を経て、18世紀前半に現在の領域にいたったが、間切範囲が確定した後も政策的な集落移動（降慶名、呉我、我部）や新設（親川、稲嶺）、合併（谷田、桃原、松田、瀬州）などがあったため地区内には様々な性格の集落が混在する。

かつての羽地地区は豊かな水田が広がる有数の稲作地帯でもあった。そもそも沖縄本島の土壌は国頭マージ、島尻マージ、ジャーガル、沖積土壌の順に多く、稲作に適した土地は少ない。その中で羽地地区は低湿地、沖積土壌という好条件に恵まれた土地で稲作に適した地域であった。そのため17世紀中頃の『琉球国郷帳』によると羽地間切の石高は1985石余りで、そのうち田は1917石余、畠は67石余で総石高に占める田方石高は約97%と著しく多い（図7）。羽地地区の歴史を振り返れば、古くグスク時代¹¹⁾には親川に親川グスク¹²⁾が存在するほか、水田地帯で

11) 考古学上の時代区分でほぼ12世紀ごろから16世紀の始めまでを指す。琉球新報社編『沖縄コンパクト事典』琉球新報社、2003、150頁。

12) グスクとは琉球孤一帯で12世紀後半から16世紀にかけて構築された城を指す。その本質については城、



図6 仲尾次の位置

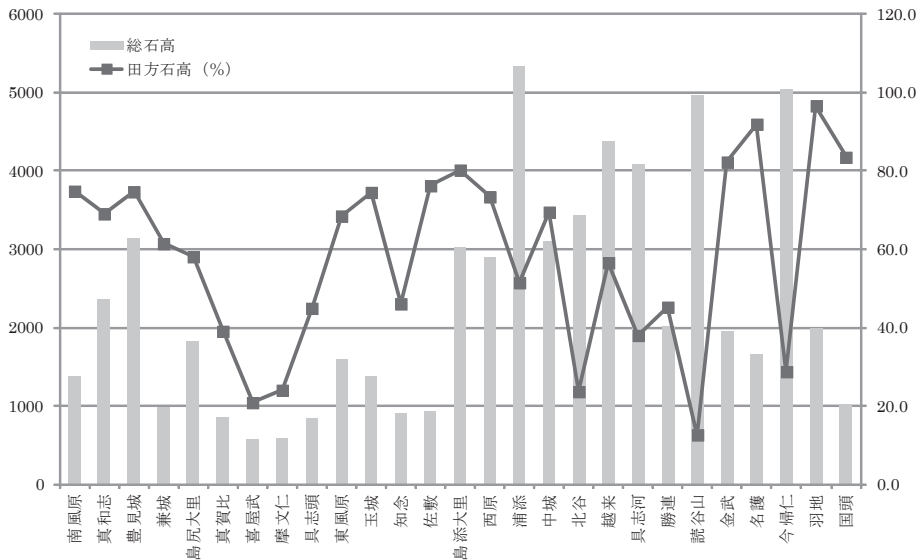


図7 琉球国郷帳記載の石高

ある羽地ターブックワ（羽地田袋）の周囲には集落跡遺跡が点在し（図8），羽地一帯はグスク時代から水田を中心とした集落が点在していたと考えられている。

住居，聖地など諸説ある。



図8 羽地内海のグスク時代遺跡
名護市編さん委員会編 1988, 35頁より引用。

仲尾次はその羽地地区の中央に南北に立地し、17世紀中頃までは「中城」と呼ばれていた¹³⁾。集落範囲には仲尾次上グスク遺跡と川之上遺跡・ウフ御嶽土器出沒地があり、仲尾次集落は川之上遺跡から集落移動がおこなわれたといわれている。それを裏付けるように川之上遺跡周辺にはノロ殿内や神アサギ、根神屋などの拝所が立地する。

字仲尾次としての行政範囲は南北に広いが、実際に住民が居住する仲尾次集落は東西約500M、南北約300Mの範囲に限られる。特段大きな集落でないこともあり仲尾次はもともと羽地地区の一集落にすぎなかったが、明治35（1902）年に親川に置かれていた間切番所（役場）が仲尾次に移動したために旧羽地村の中心地となる。その結果、昭和40年（1965）年には人口1104人とこれまでで最大の規模になったが、それ以後は減少の一途をたどり平成24年現在の人口は847人、世帯数は354戸と最大人口時の7割強程度となっている。

現在の仲尾次集落は羽地地区にある一集落にすぎないが、このように歴史を振り返れば古琉球の時代から成立した伝統的集落である点、かつては旧羽地村の中心であった点、拝所の位置が現在も把握できる点など集落内の空間構造を検証する適地であると考えられる。

13) 17世紀中頃の「絵図郷村帳」と「高究帳」には「中城村」と記載がされるが、1713年に刊行された「琉球国由来記」では「中尾次村」と記される。名護市史編さん委員会編「名護市史・本編11」、名護市役所、1988年、425頁。

3. 集落形態と空間構造

(1) 集落形態と形成思想

集落形態は空間構造の表象でもあり、そこには集落を形成する思想が大きな影響を与える。琉球一帯の集落形成の思想には大きく風水思想と「腰当」思想の二つがあり、伝統的集落では両者が取り入れられて形成されている。風水思想から集落形態をみれば、まず重要視されるのが地形・地勢である。風水思想では「気」と呼ばれる土地が持つエネルギーが重要となるために山頂から発した気をいかに集落内に流入させるかが重要となり、集落は山を背にして水に臨む「背山臨水」が最上の立地であるとされる（図3）。この考えに仲尾次集落を照らし合わせると、元の集落があった小字川之上や現在、住宅地が密集する小字松門はどちらも背後に山を抱き前面に羽地内海が面する「背山臨水」の立地となっている（図9）。さらに風水思想では集落内において「気」が停滞することなく流れ、外に漏れ出ないようにすることが必要とされ



図9 仲尾次の小字

仲尾次誌編集委員会編 1989, 63頁を一部改変。

るため、集落内街路の形状と集落抱護の考え方も重要な要素となる。したがって「気」の流れる道は「龍脈」と呼ばれるように龍に例えられ、集落内では緩やかに蛇行するような屈曲した街路が良いとされる。屈曲街路によって構成される集落は自然と「不整然」な形態をとる。「不整然」形態の集落についてはすでに仲松が琉球の集落は地割制度が導入される1737年を境にして大きく区分され、地理制度導入以前の主体部は「不整然」な形態をなすと指摘している¹⁴⁾。仲尾次の集落形態を概観すると、主体部は直線や曲線が入り交じる「不整然」な形態を示し、いくつかの街路は直線とならないように意図的な食い違いがみられる(図10)。したがって仲尾次は集落の立地、形態ともに「気」を重要視する風水の考えに適っているといえる。

次に集落形成のもう一つの思想である「腰当」思想についてみていく。「腰当」思想の元となる考え形については、以前から伝統的な集落では御嶽と呼ばれる聖地を必ず有しながら構成されることが指摘されていた。仲松はそこに「おそい」と呼ばれる御嶽の「祖霊神」が住民を保護する神の機能を見だし、多くの伝統的な「平民百姓」でみられる御嶽と集落の空間構造の関係を「腰当」と表現した。そして「腰当」思想に基づいて形成された集落の背後には「腰当

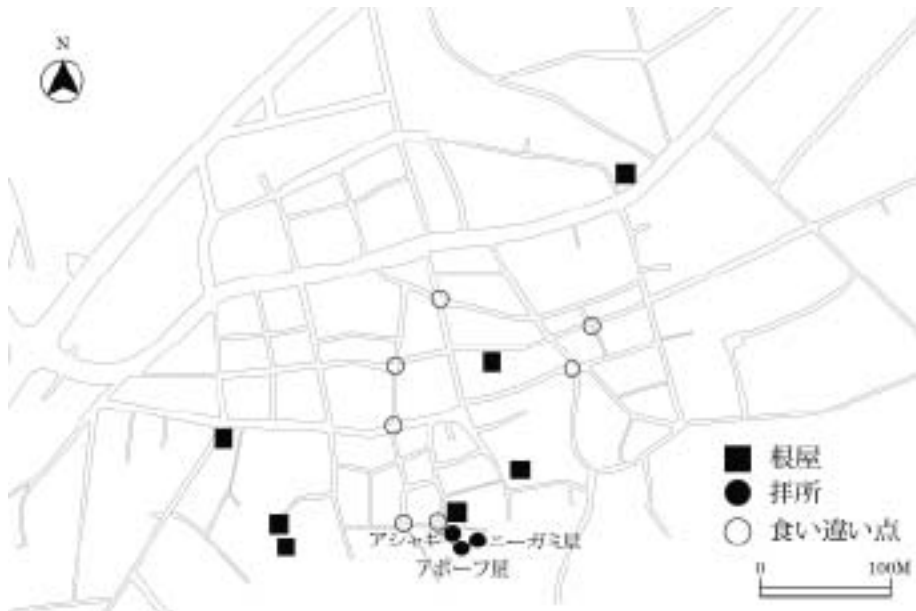


図10 街路形態と集落内の聖地・根屋

14) 仲松弥秀『古層の村・沖縄民俗文化論』沖縄タイムス社、1977、125頁。

森」となる丘や森が存在し、「腰当森」の御嶽には祖先の骨が保管されていることを指摘した¹⁵⁾。すなわち伝統的な琉球の集落は「腰当」に基づいて家屋が「村の守護神」である御嶽に抱かれるように立地していると解釈したのである。これに対して渡邊は仲松の「おそい」と「腰当」で指摘された「腰かけ状の地形」とは、集落レベルの好風水として知られてきた「後高前低の地形」と同じものであって、風水思想が影響または取り入れられたものであると指摘した¹⁶⁾。つまり風水思想と「腰当」思想は地形的にみれば極めて似かよった思想といえる。ただ「腰当」思想のもう一つの特徴は御嶽を最上位として宗家（門中¹⁷⁾の根家）、分家の順に階層的な空間構造を形成し、上位と下位の関係性を維持しつつ集落が拡大していく点にある。この階層的な関係性は現在も基本的には維持されており、筆者らが以前に調査した壺屋集落でも7つの宗家集団に対して、分家群は下位に位置していた¹⁸⁾。

では実際に仲尾次における御嶽、聖地と宗家集団の分布を考察していきたい。まず仲尾次には御嶽を含めて5つの拝所¹⁹⁾がある。以下、順に列挙すれば「黄金森之御嶽」は最も重要な聖地で現仲尾次集落の「腰当森」となっている（図11）。そして集落内には「ニーガミ屋（根神



図11 黄金森之御嶽



図12 アシャギ

15) 仲松弥秀『神と村』梶社、1990、18-29頁。

16) 渡邊欣雄「沖縄の屋敷風水—風水知識からみた民家論」（渡邊欣雄・三浦國雄編『風水論集』凱風社、1994）362-399頁。

17) 門中とは始祖と同じくする父系の血縁集団で、日常的な生活の中でも交際や相互扶助において重要な役割を果たしている。

18) 前掲10) 30-48頁。

19) 拝所とは「御願」をおこなう場所で御嶽を含めた聖地の呼称である。



図13 ウイグシク・ナカグシク

屋²⁰⁾」と「アポーフ屋²¹⁾」, 「アシャギ²²⁾」(図12)が存在し, 集落外に「ナカグシク・ウイグシク」がある(図13)。古くから仲尾次の主な御願はこの「黄金森之御嶽」, 「ミーガミ屋」, 「アポーフ屋」, 「アシャギ」, 「ナカグシク・ウイグシク」の5つの拝所でおこなってきた。

各拝所の位置を概観すれば「黄金森之御嶽」は集落の最後方にあり, 「ニーガミ屋」と「アポーフ屋」, 「アシャギ」の3つの拝

所は集落の後方に立地する。また「ナカグシク・ウイグシク」は集落北西の羽地中学校付近にあり, この「ナカグシク・ウイグシク」は仲尾次発祥の地といわれる。そもそもグシクとは城(グスク)のことで, 一般にグスクと呼ばれる場所は防御機能のみでなく, そこには拝所や聖地が含まれていることが多い。このことから仲松はグスクと呼ばれる空間の多くには人骨が埋葬されていて古代祖先の共同葬所(風葬所)であることを指摘している²³⁾。つまり「ナカグシク・ウイグシク」は御嶽と同様に「腰当森」としての機能を持っており, この点を踏まえれば仲尾次集落の拡大過程は「ナカグシク・ウイグシク」を発祥の地としてその後, 小字「川之上」へ移動し前面へ集落が拡大したという過程をたどっている。

戦前の仲尾次村役場には羽地間切の絵図があったといわれ, そこには仲尾次の戸数として7つの家が記されていた。この7戸は門中の根屋(宗家)を示していたと考えられ, そのうち6つの門中は現在の嵩川引門中, 九年川門中, 上地門中, ひやがいの引門中, 前田引松田門中, 上地引門中, 名嘉真門中である²⁴⁾。6つの門中にはいずれも300年前から続いているといわれ, それ

20) マキヨと呼ばれる古代集落の時代には, 草分け家の兄弟(エケリ)がマキヨの政治的支配者となって根人と呼ばれ, エケリの姉妹(オナリ)が宗教的支配者となったのが根神と呼ばれていた。根神屋とはこの根神に関係する場所である。

21) アポーフとは大親のことで, 根神のエケリ神(兄弟神)を指す。祭政一致の時代には高位の政治職でもあったが, 祭政が分離されたのちにはもっぱら神職としてのみ存在した。

22) アシャギはアサギまたは神アサギと呼ばれ『琉球国由来記』, 『琉球国旧記』などには神アシアゲと表記されている。アサギは「村の神を招いて祭をおこなう小屋」または建物と指摘される一方で「祭祀をおこなう空間」を指すとする意見もある。①琉球新報社編『沖縄コンパクト辞典』琉球新報社, 2003, 122頁。②前掲15) 179-189頁。

23) 仲松弥秀『うるまの島の古層—琉球弧の村と民俗』梟社, 1993, 94頁。

24) 7つのうち残り1つの門中はどの門中にあたるのか不明である。仲尾次誌編集委員会編『仲尾次誌』仲

はこれまでの系図および墓調査からも確かである。したがって、この6門中は集落が形成された初期から存在していたと考えられ、門中の分布を検証することによって集落内での宗家・分家の空間的關係が明らかとなる。そのため本稿ではまず集落内の主要な門中である上記6門中について字誌に記載された門中史料と地籍図、住宅地図を用い、根屋と門中一族の空間的配置を検証することとした。また上記6門中の他に集落内に根屋を持つ主要な1門中についても調査した。調査では字誌が刊行されたのが1989年であるのに対して住宅地図の刊行が2006年とその間に17年間の刊行時期の違いがあるため、全ての門中所属者の居住地が特定できるものではなかったが根屋と門中分布の一定の關係は把握できた(図14)。

図からは根屋の多くが集落の南方に点在している点が確認できる。唯一G門中の根屋は北側に立地するがこの門中は羽地間切の絵図には記載されない門中なので、絵図記載の6門中は集落南方に立地しているといえる。またA門中は根屋とその一族ともに集落東側、B門中は集落西側などと門中ごとに東西への一定の集中がみられるのも特徴的である。その他にもD門中では根屋周辺への著しい集中がみられ根屋を中心とした居住分布が認められる。

次に各門中が継承する祭祀者の階層性と拝所との空間的關係をみていきたい。祭祀をおこな

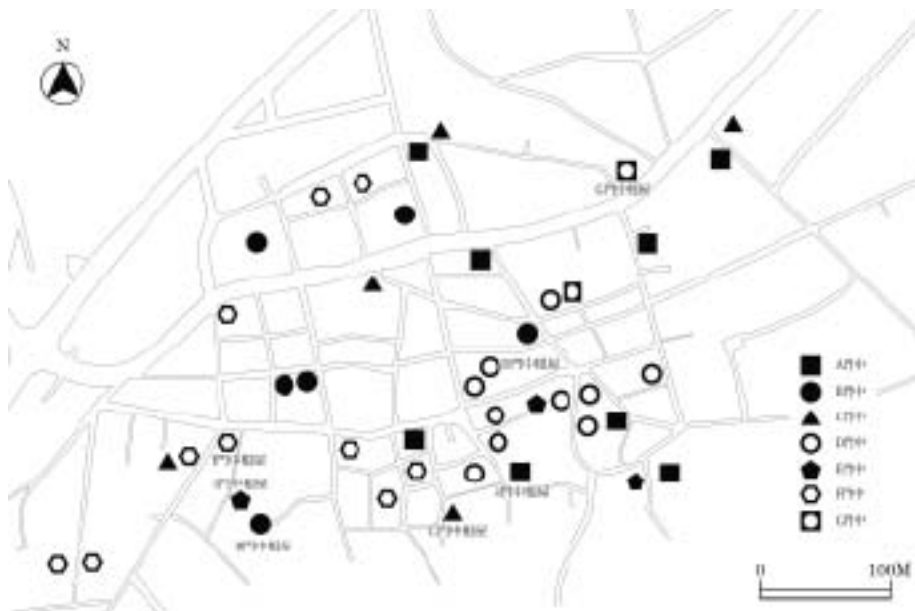


図14 門中の分布

尾次誌編集委員会, 1989, 201頁。

う上で最も上位のノロと呼ばれる神人²⁵⁾はA門中から代々選出され、古代集落の時代の宗教支配者である根神はB門中から選出されている。ノロと根神の宗教的な性格は同様に職能にも著しい違いはないが、古代集落の時代よりも一層、政治的社会化の進んだ按司社会²⁶⁾ではノロは宗教的勢力の保持者であるために根神よりも政治的色彩は濃厚であった。琉球王国が建国された後の尚真王の時代(1477~1526)には神女組織が確立し、ノロが地方神女組織の最上位としてその地位を占めるようになる。すなわちノロと根神の間にはノロ>根神という祭祀上の階層性が成立したのである。このような経緯を踏まえると、ノロが選出されるA門中は集落において非常に重要な門中であるといえる。さらにA門中から選出されるノロは仲尾次集落のみでなく、仲尾次・真喜屋・稲嶺という3集落を司る真喜屋ノロであり、その重要性は一層高い。この点を踏まえてあらためて根屋と聖地の分布をみると「ミーガミ屋」、「アポーフ屋」、「アシャギ」の3聖地のそばにA門中とC門中の根屋があることが確認できる。3つの拝所に関しては移転に関する伝承も残っていないので集落形成当初から現在の位置にあったと仮定することが可能である。したがってA門中と拝所は空間的な関係からみても集落形成の当初から密接に結びついてきたといえ、A門中は拝所を上位空間に持ちつつ根屋が配置されていたといえる。一方、祭祀上重要な位置を占めるB門中の根屋は拝所から離れた場所に存在し、一見すると拝所とB門中の空間的関係性は希薄であるようにみえる。ところがB門中の歴史をみると、B門中は根屋を持つ独立した門中であるが元はA門中の分家で、A門中からB門中が分家したのはごく最近である。つまりノロを排出するA門中と根神を排出するB門中は元々、同一の門中だったのである。よってB門中が拝所付近にないのは、分家したのがごく最近であるため拝所の近辺ではなく土地が余っていた少し離れた場所に立地したといえるだろう。このような門中の歴史的経緯からは仲尾次集落においてもノロと根神がかつては同一のものであった、またはノロと根神は極めて似た存在であったという事実が垣間見えてくる。

またA門中と同じく拝所のそばにあるC門中も祭祀上で重要な位置を占める門中の一つで、祭祀を担当する神人10名のうち4名がこの門中から排出される。神人は同一の門中によって代々継承されるものであり、一般には村建てをおこなった門中やその当時の有力門中が引き継ぐものである。よってC門中もまた祭祀上重要な位置を占めつつ、拝所を上位に持つ空間配置をおこなっているといえる。

各門中が継承する祭祀者の階層性と拝所との空間的關係からは拝所を上位とした根屋の分布

25) 祭祀をおこなう人物のこと。最も上位のノロは女性である。

26) マキヤマキヨと呼ばれる古代集落期の後には按司と呼ばれる有力者が現れはじめ、各地方を治めていた。

がみてとれた。このような空間的配置がおこなわれるのは集落内にある3つの拝所の中に「アシャギ」が含まれることが大きく影響したと考えられる。「アシャギ」は御嶽と同様に「神の存在する空間」としての機能を持つ²⁷⁾ことから、仲尾次における根屋と拝所の空間的な関係は「アシャギ」を中心とした祭祀空間としてみることも可能である。

以上、仲尾次における拝所および根屋とその分家群の分布をみてきた。ここからは拝所を最上位として根屋がその前面、さらに前面に分家群が展開する空間的な傾向をはっきりと確認することができた。また、門中の中でも祭祀的な階層が上位の門中ほど根屋周辺に立地する傾向も認められた。したがって、仲尾次集落では「腰当」思想にもとづく居住分布と祭祀空間の形成がおこなわれていたということが出来る。

(2) 石敢當からみる伝統的地理観の分布

伝統的集落は現在のように画一的に区画割りをおこなうのではなく、そこには拝所や祖霊崇拝をもとにした形成思想が存在する。そのような集落では風水で用いられる「気」の考えや、自己世界と外界を区別する内在意識などの伝統的地理観や民俗観が今なお残存する。筆者らはこれまでも石敢當(図15)という魔除けの一種を指標として集落の空間構造と伝統的地理観の関係についていくつか考察をおこなったり、集落内外に残る妖怪の出没地分布の考察から伝統的地理観、民俗観を捉えようとしたりと様々な手法による検証を試みてきた²⁸⁾。その結果、石敢



図15 石敢當

當に関しては地域によって本来の意味が忘れられて設置されている場所も数多くあった。すなわち本来ならば悪気は直進するという考えから道路の突き当たりや交差箇所にかかる石敢當

27) 前掲15) 179-189頁。

28) ①高橋誠一・松井幸一「神の島・古宇利島の集落と伝統的地理思想—琉球としての再認識と強調—」関西大学東西学術研究所紀要第45輯, 2012, 77-106頁。②高橋誠一, 松井幸一「奄美大島龍郷町の集落と石敢當」東アジア文化交渉研究第3号, 2010, 359-394頁。③松井幸一, 高橋誠一「聖地・妖怪分布図からみる境界空間と住民意識—龍郷町を事例として—」関西大学東西学術研究所紀要第44輯, 2011, 243-272頁。④高橋誠一, 松井幸一, 松井僚平「今泊の集落景観と保全」(沖縄県今帰仁村教育委員会『今帰仁村文化財調査報告書第25集 今帰仁城跡発掘調査報告Ⅲ』沖縄県今帰仁村教育委員会, 2008) 57-79頁。

が、もはや単なる置物として意味を失いながら設置されていたのである。しかしその一方で、「腰当」思想がはっきりと確認できるような伝統的集落では石敢當は概ね基本的な理念を守りながら分布していた。そこで、本稿では仲尾次集落の石敢當がいかに分布しているかに着目して、集落内の空間構造と伝統的地理観の関係を検証していく。

まず集落内には全60基の石敢當を確認することができた(図16)。一集落における平均の石敢當に関する統計は無いためこの数字をいかに評価するかは難しいが、例えば筆者らが以前調査した今帰仁村の今泊集落では45基、古宇利島の集落では49基であったのに比べるとその数は多い。1基あたりの戸数の割合でみても今帰仁城の麓にある城下町集落ともいえる今泊集落が8.7戸に1基、現在も伝統的な祭祀が残存し人類発祥伝説の残る古宇利島の集落が6.3戸に1基であるのに対して、仲尾次集落では4.1戸に1基とかなり稠密な割合で設置されている。

次に石敢當の設置箇所と街路の形態をまとめたのが表1である。設置箇所をみると全体の9割が石敢當設置の基本原則である屈曲した街路に設置されており、魔除けという本来の意味を踏襲しながら、集落全体に偏り無く設置されている。筆者らが以前調査した古宇利島では石敢當は集落内の古い区

表1 石敢當の設置箇所

街路の形状	数
直線	6
L字型	1
突き当たり	2
三叉路	28
四叉路	23
計	60



図16 石敢當の分布

画に多く偏在していたのに比べて仲尾次では古い区画である集落の南方にのみ設置されているのではなく、比較的新しく開発された区画にも広範囲にわたって確認できる。つまり石敢當にみられる伝統的地理観は特定の一部の人のみが継承してきたのではなく住民全体が共有しているといえる。また、仲尾次集落では古い石敢當はほとんどみられない一方で表札型や土産物屋で売られているような新しい形態が多いのは建て替えや新規建築の際にも石敢當を設置するという習慣が残っているため、ほとんどの住民が伝統的な地理観を共有している証左であろう。

(3) 区画内の分割数からみる集落空間

すでに述べたように琉球では1737年を区切りとして地割制度が導入され、その前後では区画の形態が大きく異なる。またそれにとまって一区画あたりの宅地の数も変容していく。そこで、ここでは仲尾次集落の区画内宅地数と区画の形態を分析することによって、仲尾次集落の空間構造を検証していく。なお分析にあたっては現在の区画が戦後、大幅に変更されているため昭和初期を想定し復原された仲尾次の地図を用いた²⁹⁾。この復原図を用いて一区画あたりの宅地数を表したのが図17である。この図からはまず一区画あたりに1戸の宅地しかない区画が集

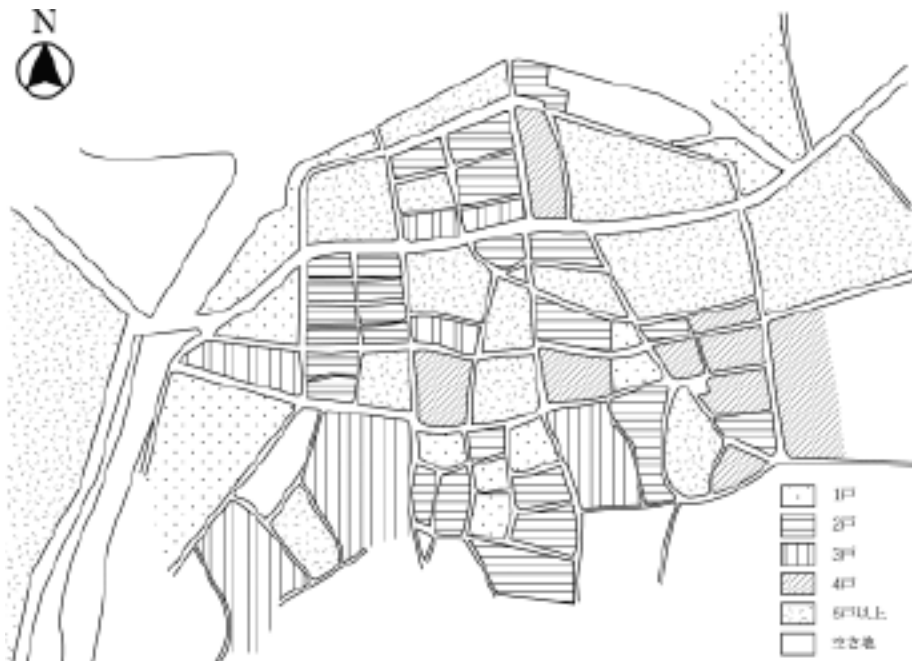


図17 一区画あたりの宅地数

29) 前掲24) 仲尾次誌巻尾に収録。

落南方の拝所周辺に集中していることが指摘できる。1区画あたりの大きさは均一ではないため単純な比較はできないが、1区画に1戸の宅地しかない場合は複数の宅地がある場合に比べてその宅地面積も大きくなる。したがって、拝所周辺には比較的大きな面積を有する宅地が集中しているといえる。これらの宅地の多くには前述したように集落の形成当初から仲尾次に居住する根屋の一族（門中）が分布しており、拝所の周辺に存在する空間の上位性は地割からもみてとれる。また、拝所周辺では1区画に1戸の地割が多いのに対して、拝所からの距離が離れるごとに1区画あたりの宅地数が2戸、3戸と増えていく傾向も見取れる。これは根屋を中心として分家群が下位、すなわちより集落の外側へと立地するため集落外側の区画では一区画あたりの宅地数が多くなると考えられる。

次に区画内の宅地割の形態についてみていきたい。坂本によれば宅地割は大きく分けて縦に家が並ぶ縦型と横に並ぶ横型、そして田の字型にわけられる。縦型と横型はさらに一列型と二列型にわけられ時代を経るにしたがって横一列型へと収斂していく。また、地割制度が導入される1737年以前の集落全体としての宅地割は縦型と横型、田の字型が混在する形態であった。したがって集落内の宅地割がどのような形態なのかをみることはその宅地がいつ頃形成されたかを知ることに繋がり、集落内部の空間構造がいかに変容したかの過程を明らかにすることに

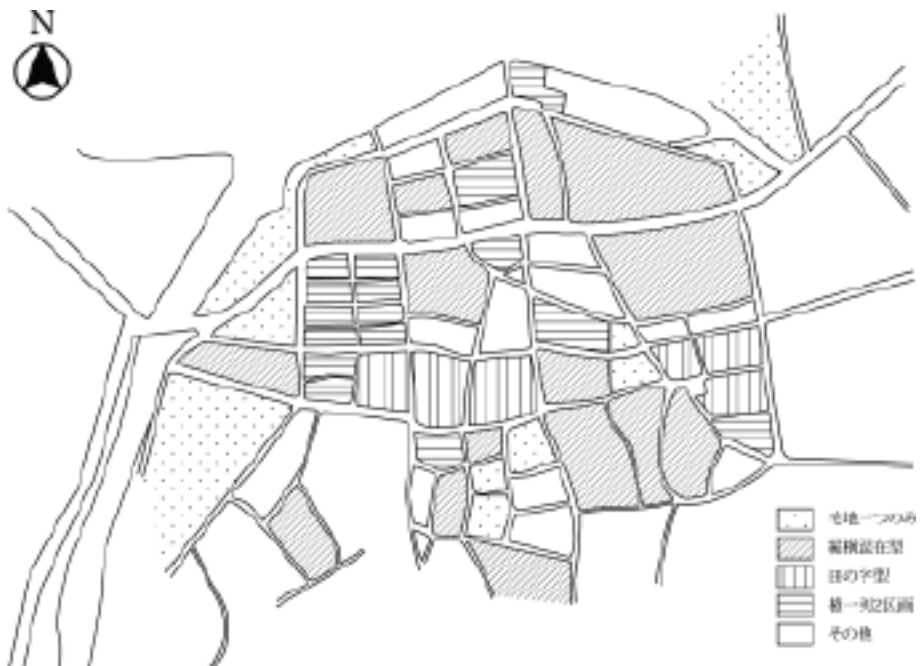


図18 宅地割

なる。このような観点から昭和初期の復原図をもとにして一区画あたりの宅地割を示したのが図18である。まず集落全体をみれば様々な区画が入り交じる混在型で、坂本が指摘するように地割制度導入以前の古い宅地割形態を示す。さらに一区画ずつみていくと宅地が一つのみの区画と縦型と横型が入り交じる混在型³⁰⁾、田の字型、横一列2区画型によって構成されている。縦型と横型が混在するような区画は基本的に地割制度以前の古いもので、この型は集落全体にみられ規則性はないようにみえるが、図13の門中の分布と合わせて考えると古くからの門中がある区画は混在型が多いのに対して、古くからの門中がない区画は田の字型や横一列2区画型が目立つ。つまり、仲尾次集落では混在型の区画と古くからの門中の分布は密接に結びついており、一定の関係性が認められる。

4. おわりに

本稿では集落が立地する地形、街路形態、拝所・根屋・分家群の分布、地割および一区画あたりの宅地数とその形態から仲尾次集落の空間構造を考察した。以下に本稿で確認した点と明らかになったことをまとめれば、仲尾次には複数の遺跡が残り古琉球のころから集落が存在した。現在の仲尾次集落は17世紀まで「中城」と呼ばれており、当初の集落は「ナカグシク・ウイグシク」周辺にあり、仲尾次集落は「ナカグシク・ウイグシク」を発祥の地としてその後、小字「川之上」へ移動し前面へ集落が拡大するという過程をたどっていた。

字仲尾次は南北に長く集落は羽地内海に面する北端部に位置し、全体的にみれば背部に山があり前面に水がある「背山臨水」の形をとっている。また、集落内部は屈曲する街路が多い「不整然」型で所々に街路の意図的な食い違いもみられるなど、街路は風水思想の「気」の流れを重視した形態をとっている。

拝所と呼ばれる聖地は集落の中央部後方に集中して立地し、その周囲には根屋と呼ばれる門中宗家の家がある。根屋と分家群の分布をみると根屋の前面に分家が立地することが多い他、門中ごとに東西への一定の集中がみられた。また、各根屋が継承する祭祀者の祭祀的階層性と拝所との位置からは、ノロや神人を継承する祭祀的階層が高い門中ほど拝所近くに立地しており、拝所を上位とした根屋の分布がみてとれた。このような拝所と根屋、分家群の空間的配置は仲尾次集落でも「腰当」思想にもとづく居住分布と祭祀空間の形成がおこなわれていたと証左である。

石敢當の分布から伝統的地理観を検証した結果、石敢當はかなり稠密に設置されていた。そ

30) ここでの混在型は一つの区画の中に縦型と横型が入り交じることを指す。

の分布は偏ることなく集落全域にひろがり、伝統的地理観は特定の住民のみが継承してきたのではなく集落全体が共有しているといえた。

一区画あたりの宅地数は拝所周辺では1区画1宅地が多く、集落の外側にいくにしたがって1区画2戸、1区画3戸と増加する傾向が認められた。これは「腰当」思想からみれば拝所や根屋から離れる（集落の外側にいく）にしたがって下位となるため、分家群が1区画を分割して利用しているためと思われる。つまり1区画あたりの宅地数も「腰当」思想の影響を受け階層的に構成されていると考えられる。また、宅地割の形態からみれば集落全体は混在型で古い形態であった。さらに古い門中は一区画内に縦型と横型が入り交じる混在型に多く立地し、宅地割と門中分布の間には密接な関係があることを指摘できた。

以上、本稿では仲尾次集落の空間構造を考察した結果、仲尾次集落は風水思想と「腰当」思想にもとづく集落形成をおこなっていることを確認するとともに、「腰当」思想が宅地割に与える影響も垣間見ることができた。

本稿では風水思想と「腰当」思想を軸として集落内部の空間構造を検証してきたが、2つの思想の影響をより実証的に分析するためには住民の方位観や「屋敷抱護」といった細部の検証が欠かせない。また、家屋構造から集落景観を捉えることによっていかに集落形成の思想が継承されてきたのかを考察する必要もあるだろう。これらの考察は本稿を序章として別項にておこなう予定である。

【付記】

本稿の調査では名護市教育委員会の宮城弘樹氏にご協力とご教示をいただいた。また集落調査では、大兼遥・梶原海・岸本遥・島袋滝子・高嶺竜一・恒吉和輝・渡嘉敷宮・鳥田和太郎・真栄田義人・宮城海人・山城留利子（50音順）の11名の協力を得た。今回の調査は現地の方々の協力がなければなし得ないものである。ここに記し厚く御礼申し上げたい。

現地調査には日本学術振興会2012年度科学研究費：（基盤研究A，課題番号22242028，「環東シナ海・環日本海沿岸域の文化交渉と歴史生態をめぐる学術的研究」，研究代表者：野間晴雄）の一部，2012年度関西大学東西学術研究所の一般出張旅費および報酬費の一部を使用した。